
血の雫

梅雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血の雫

【コード】

N6819B

【作者名】

梅雨

【あらすじ】

四年たって。高校になった今でも、彼女は自分よりずっといろんな事を考えていた。いつも自分じゃなく、相手のことを思って、今でも傷ついていた・・・。

序章

「……………」

少し、緊張していた。

女の子のケータイに連絡することなんて何でもなかったはずなのに。

保坂優斗は、自分がそんなことを考えていることに少し、驚いた。「なんでだろ……………」

優斗はひとりつぶやいた。けれど、理由は自分自身が一番よく知っていた。

彼女は初恋の人であり（ついでに言うと小学校以来連絡も取っていないし）、しかも得体の知れない不思議な力を持っているからだっ

た。
「覚悟決めるか。どうせ、このままじゃ俺の手には負えなくなるし……………」

そう言っつて、やっと覚悟が決まったのか、優斗はケータイをいじり始める。

慣れた手つきでアイコンを彼女の名前に合わせる。

「おしつ、いくぞっ！」

何をそんなに尻込みしているのか…………。

そんな自分に情けなさを感じながらも、ケータイの決定ボタンを押す。

トウルルル…………。

『はい。こちらつひですが〜』

少し気の抜けたような女の子の声が聞こえた。

「俺…………優斗だけだ。覚えてる？」

一瞬、驚いたような気配が、電話越しに伝わってきた。

が、それもほんの数秒、すぐに彼女　　雫は気を取り直したように答えた。

『覚えてるに決まってるでしょ。それで、用件は何？』
雫の比較的普通な態度に内心ほっとしながら、優斗は用件を伝え
た。

「里中煉さとなかれんが、霊に取り憑かれてる。・・・しかも他の霊を、どん
どん取り込んで強くなってる。　　　助けてほしい。」

序章（後書き）

第一章 携帯電話

「さとなかれん里中煉が、霊に取り憑かれてる。．．．しかも他の霊をどんどん取り込んで強くなってる．．．。助けてほしい。」

『！！』

さすがに、雫も驚きを隠せないようだった。

が、すぐに立ち直ると優斗への罵倒の言葉を口にした。

『どーしてすぐ連絡してくれなかったの！しかも“助けてほしい”

ってなによ！言われなかったって助けるわよ。他の霊を取り込むって．

．．．どんだけ強くなってるのよツ！バカッ！！』

雫は相当怒っているようだ。考えてみれば当たり前だ。場合によっては、煉の命に関わるのだから。

事実、優斗が悪いのだ。かなりの初期段階から判っていたにもかかわらず、雫への後ろめたさから連絡するのを先延ばしにしていたのは、他ならぬ優斗なのだから。

『どうせまた変な意地張って、連絡するのが遅れたんでしょ！！憑依されることがどれだけ危険かって事くらい、判っていたでしょう？』

雫の声には、不甲斐ない優斗に対する怒りと、どうして自分で気づけなかったのかと言う自分への怒り、そして意地を張って連絡をくれなかったことに対しての悲しみ．．．。

色々な想いが混じり合っていた。

「．．．．ごめん」

素直に優斗は謝る。

『．．．．いや、こっちこそゴメン。言い過ぎたかも。私自身、気づけなかったわけだし．．．．』

雫の落ち込んだ声が聞こえてくる。

「それで、煉のことだけど。」

「え、それはちょっと・・・」

『つべこべ言わないの。行動は早いほうが良いでしょ！？分かったよね、じゃあ明日っ！！』

ツーツー・・・。

しばらく、優斗は呆然としていた。

事は忘れたんだろうか、俺の高校が中高一貫の男子校なんだって事。

第二話 校門で

失敗した。

荻原男子高等学部の校門に立ちながら、雫はそう思っていた。
ちゃんと優斗の言うこと、聞いとけば良かった。

自分が悪いのだ。優斗の制止も聞かずに強引に来てしまったのだから。

はやく、来ないかなあ……。

結構限界まで来ていた。

ここは、中高一貫の男子高校。そんな学校の校門に、めっちゃかわいい女子（本人に自覚はない）がいれば、目立つことこの上ないのだ。

さつきからずっと、下校していく生徒達にじろじろと見られまくりなのだった。

うう……。だって忘れてたんだよ。あの電話の時は。

正確には、来る途中まで気づかなかつたのだが。まあ、そんな事実、雫は無視する。

はやくこーい。優斗お……っ

その間にもじろじろと無遠慮な視線が送られてくる。

「ねえ、きみ誰待ってるの？良かったらこれから遊ばない??」

典型的なナンパ男が話しかけてきた。

「え、えーと……。保坂優斗ほしかゆうとって人待ってるんですけど……。一年の……。」

何だか恐くて、雫は小さい声で答える。

「ちっ。また保坂の女かよ……。」

ナンパ男がつぶやいた言葉を雫は全く聞いていなかった。

何故なら、

なんかこの人、不良オーラ出してるよ……。どーしよあ……。

泣きそうだったから。

しかもこのナンパ男がきても、思うことはあまり変わらなかった。優斗おおーっ！早く来てーっ！

若干、必死さが増したが。

が、雫の願い届かず。逆にナンパ男の仲間らしき人が五人新たにこちらに向かつて来る。

「えーなに、お前の彼女？んなわけないか。ちょっと俺にも紹介して」

え、え〜！？ちょっと、何で増えるのよ！！

「ん〜今ナンパしてるトコ〜。っーかさ名前なんて言うの？保坂なんかやめてさあ俺らと遊ぼうよ。」

ん？保坂なんか・・・やめて??

「あ、あの〜、保坂君のこと知ってるんですか。」

自然と優斗のことを名字で君付けしてしまった。いつぶりだろう。それより、なんでこの二年らしき人が優斗のこと知ってるんだろう。まあ、確かに優斗、見た目は良いけど男子高校じゃ関係ないんじゃないのかなあ・・・。

「ああ、知らないのか。あいつさ〜見た目に物言わせてしよつちゅう女連れてんの。しかもいつつも違う女で美人が多いの何のって。なあ、女たらしだろ〜。だからさあ、俺らと・・・」

ナンパ男はここぞとばかりに売り込もうとする。そんなナンパ男のセリフを遮って、雫は言った。

「え、と。すみません。私は保坂君とは付き合っていないし・・・。それに今日は保坂君に用事があったので。えっと、あの・・・ちよっと遊ぶのは無理で・・・あの、すみませんっ。」

かなり頑張っていった。・・・つもり。
「えー用事って何〜？いいじゃん、今度でさあ」
う、しつこいよお。

「え、ええ〜と・・・その・・・」

困った。やばいぞ。なんだか力ずくでもつ連れていかれそうな気

配がひしひしと伝わってくるんですけどおっつ。

「やー、ごめんごめん。待った？雫。」

優斗の声があった瞬間、ナンパ男達がぴくりと反応した。

「あ、ごめんね。雫ちゃんは俺らと遊ぶ事になってるから。保坂君は引っ込んでくれるかなあ？」

ナンパ男達の声がめちゃくちゃ 敵対意識むき出しなことに雫は驚いた。

え、もしかして先輩さん達と仲悪いの？しかも女たらして・・・ホントなのかなあ。っていうか、私遊ぶなんて言っていないし!!! 優斗、なんとかして・・・。

「えーだめだめ。さいっしょから雫がここに来たのは俺に会うためなんだから。なあ、雫？」

こくこくっ！

と強めに何度もうなずく。これ以上は嫌だった。

「そんなことないよねえ？雫ちゃん??」

がくがくがく・・・

顔を近づけてきたナンパ男は、めっちゃこわかった。すごんできたし。

「ねえ、そうだよね、し・ず・く・ちゃ・ん??」

がくがくがく・・・

震えるだけで何も反応しない雫に、ナンパ男はさらに顔を近づけて、すごんできた。

「うっ・・・」

がくっとなが膝をつく。

「わっ、ヤバ。」

その光景を見て優斗はつぶやく。

「おっおい。俺たちは何もしてないぜ!?なあ!!!」

周りから受ける「そこまでするのかよ、最低だな」という視線に

ナンパ男達は必死で弁解しようとする。

「お、おい。どうしたんだ・・・」

よ、と言う前に雫にふれようとしたナンパ男は宙を舞った。

「雫に」

ばったーんっ

ナンパ男が地面にたたきつけられる。

「さわるな」

ナンパ男を投げ飛ばした本人　　優斗が冷たい目で残った五人を睨み付けた

「雫の手前、穩便に済ませようとしたんだけどな。もう雫に関わるなよ・・・」

仲間の一人が「ひっ」と声を上げて逃げていく。それをきっかけにみんな一斉に逃げだした。投げ飛ばされたナンパ男は放置されている。

「雫、大丈夫？」

何事もなかったかのように、優斗はうずくまっている雫に声をかける。

が、雫はナンパ男が投げ飛ばされたことにも気づいていない様子で、動かない。

「雫・・・」

優斗の手が肩に触れると、雫はしゃべり出した。いや、しゃべり出したと言うより、つぶやきだした。

「や・・・っ。だめ、なの。抑えなきゃ・・・抑えなきゃ・・・」

雫は焦点の合っていない目でつぶやくだけ。

「だめなの・・・あ」

突然つぶやくのをやめると、ふっ、と倒れた。

「雫!!」

優斗は倒れた雫を抱えた。周囲から「あれ、やばくないか」「さっきのやつらになんかされたんじゃないかねえの」と囁きあう声が聞こえ

たが、優斗は無視して走った。

第三話 過去

自室で、優斗は悩んでいた。何を悩んでいたかというところ自分のベツトに寝かされている、雫のことについてだった。

「うーん……。これは、仕方ないんだよな、それに小学校の時にも何回かしたし……。このままじゃ雫も苦しいだけだし……。うん、そうだな！ そうなんだっ！！」

なんだかまた雫に対して決心をする優斗。

「お、おしっ！」

あーなんで雫相手だところも緊張してしまうんだろう。他の女の子は大丈夫なのになあ……。

自分に自分で呆れていた。たかだかキス程度のことです、どうしてこんなに緊張しているんだと。

「ん……」

合わせた唇から雫のうめき声が漏れた。

優斗はゆっくりと唇を離した。すると見計らったように雫が目を開けた。

「……小六ハムシキの卒業式以来だね。」

にやり、と雫は笑った。

「……ハズい。」

真っ赤になって、優斗は俯いた。

「えー。キスで恥ずかしがるの？ 女たらしの優斗君。」
くすり、と雫は笑った。

「えーと、それは……。あのお……」

答に困った。雫にふられたから、やけくそで寄ってくる他の女の子と遊んだなんて口が裂けても絶対に、言えない。

「ふふ……。でも良かった。彼女は居ないんでしょ？」

嬉しそうにまた、雫は笑った。

「……それはどういう？」

期待する自分と、在るはず無いと、傷つかないために否定しようとする自分が居て。

結局、悩んでもどうしたって期待してしまっただ。はずれたときに初めて期待していたと気づくだけで……。

「んー、だってこれから一緒に行動するのに困るじゃん。彼女だって嫌だろうし……。しかも人工呼吸みたいなもんだけどさ、やっぱキスだし。私が彼女だったらめっちゃ嫌だろうなーと」
やっぱり。

こうやって期待するから。結局自分が傷つくんだ。

「……？どうしたの。何か暗いぞ、優斗??」

さっきのキスは、雫の言うとおりの人工呼吸に近い。雫は強い能力ちからを持った優秀な被い師だが、その若さから、自分の身体に宿る大きな力を抑えきれない事が多い。校門で雫が焦点の合っていない目をしていたのは今にも力があふれ出しそうだったから。“人工呼吸”は、そのあふれだしそうな力を相手に移すことが出来る。……つまりここで言う俺に。

基本的には、雫が感情を抑えられなくなったとき、“それ”は動き出す。瞬く間に雫の意識を奪って、対象を容赦なく、殺す。厄介なことに一度発動してしまったら、そう簡単には止められない。

かつて雫は小学校三年生の時、クラスの約半分に当たる十七人もクラスのメイトを皆殺しにしたことがあるのだった。そしてそれから雫は枷になるのもいとわずに、知人全てに徹底的に術をかけた。もしまた自分が暴走してもその人達には絶対に危害を加えないように。だから電話で怒られたときも俺は殺されずに済んだ。

「おい、優斗？優斗くん？だいじょーぶかい？」

雫がひらひらと優斗の顔の前で手を動かす。

物思いにふけていた（正確にはやっぱりどうとも思われていなかった事へのショックでマイナス思考になっていた）優斗は現実を引き戻された。

「あ、いや。雫はいいのかと思って」

「は？と言う顔を、雫はしていた。

「や、だからさあ。なんか居もしない彼女の心配ばかりで、自分の心配はしないの？」

「はあ？？雫の頭の上に浮かんでいる『？』が更に増えた。

「これでも通じないのか……。ほんと、他人のことは考えるのに自分の事となると、何にも考えてないんだから……。」

「だから！雫はいいのかって聞いてるんだよ。これから俺と行動するんだろう？他の奴らにそりゃあもう盛大に誤解されるぞ、って言うてんの！分かったか！？」

「優斗がキレた。そりゃあもう盛大に。

「えー大丈夫だよ。私誰にどういわれたっていいし。カレカノって事にしとこーよ。色々面倒くさいし。」

「それを聞いて少しピンと来た。

「きつと高校で友達、居ないんだろう。小学校でも三年生のあの事件以降、雫にとって友達と呼べる女子は真那だけだった。その真那も小六の三学期に悪霊に取り憑かれて、死んだ。」

「それから、雫は独りになった。

「煉から少し聞いてはいたが……。俺の噂も届かないほど、教室で一人なんだろう。」

「そっか。分かった、派手に宣伝しちやおうかなあ」

「優斗が雫を笑わせようと、冗談めかして言った。

「はあ！？何のために宣伝なんてするの。」

「笑って、雫が聞く。

「んー。だってさあ盛大に宣伝しとけばさ、今日みたいなやついなくなるかも。」

「あ、そっか、と雫が同意してくる。

「そうだねっ。賛成！！今日の人たちめっちゃ恐かったもん。もう優斗来なかつたらどうしようかと思っただよ……て、優斗？……わっ。」

「優斗は雫を抱きしめていた。」

「ごめん。俺の能力は、雫ちからのに比べたら塵同然だし、視えるだけで何にも出来ないし。だけど、せめて人間からは俺が雫を護るから・・・」
ぎゅっ、と強く雫を抱きしめる。雫は抵抗しない。
「うん・・・。ありがと。」

「とりあえず、今日は帰るよ。一回発動しかけちゃったし。煉、学校では普通なんでしょ？」

靴を履きながら玄関先で雫は言った。

「ん、まあ人並みには。勘づいてるやつもいるかもだけど、霊とかそう言うところまではわかんないと思うし。あ、送ってくよ。」
そう言って、自分もいそいそと支度を始める。

「あ、うん。お願い。」

いつもの雫なら断っていたが、今日は素直に受け入れてくれた。俺は少しでも彼女に近づけたらどうか。そんなことを思いながら雫と一緒に外に出た。

「わあ・・・。雪だあ・・・。」

上と下をマンションの壁に阻まれながらもちょうど二人の視線の先には雪の舞い散る景色があった。

「綺麗・・・。久しぶりに見た・・・。」

壁（手すり？）から少し乗り出して雫は、雪を受け止めるように手をのばす。

「あんまり乗り出すなよ・・・」

こうして雨や雪、空を見上げるときなど雫はとても無邪気だ。

「ちよつと意外。」

いきなり雫がそう言った。

「は？何が？？」

そう優斗が聞き返すと雫は言った。

「ん、部屋がきれいだったから。」

はい？目が点になった。どうしてこのタイミングでそれを言う???

「あははっ。ワケ分かってないでしょ。なんつーの………仕方返し??？」

え………。ああ、俺がキレたときか。

「仕返して……。」

呆れて物も言えない。

「うふふっ。いいじゃん。でも意外だったのは本当。一人暮らしでしょ？もしかして定期的になま風呂が家政婦でもやってるの？」

「ぶっ」

これには思わず吹き出してしまった。

風呂とは、小六の時同じクラスだった優斗の仲のいい友達だ（もちろん男）。俺と一緒にになって雫と遊んでくれた数少ない二人共通の友達。ちなみに綺麗好きで運動神経抜群。

「んー。まあ結構風呂とはゲーセンとかで遊ぶけど……。ああ、確かに家来て徹底的に綺麗にされたときがあったかなあ。何か最近その綺麗さがもつようになってきてるんだよね。」

そう言って歩き出す。

「へえ〜。変わってないと思ってたけど、ちょっとは成長したんだ〜?」

後ろから雫がぱたぱたと追いついてくる。

「うるさいな〜。あ、そうそう。気をつけて。多分明日には噂になってるから。」

「え、なにが??？」

ホントこいつ何にも考えてないな……。いくらなんでも考える事と考えない事について差が出すぎだ。

「だから〜。俺との噂!!!」

もう少し意識してほしい。

「んー。そんなこと言われてもなあ。だいたいどーやって気をつけるの。」

うつ……。確かにそうかも。

「まあいいんだよ。とにかくそう言うことで!」

「変なの〜。」

くすくすと雪は笑った。

その顔がすごくかわいくてそれを見ることが出来て、すごく幸せだった。

その時俺は舞い上がって、気づかなかったんだ。

煉の黒い気配に

……。

・
・

優斗の明らかな嘘を当然の如く雫は見破った。

「うそつ。きつと限界以上に受け取ったんでしょ？」

そう言っつて雫は額に手を乗せてきた。ひんやりと冷たくて気持ちいい。

「んー。これしか役に立たないんだからさ。無理さしてよ。」

自分で言っつてて説得力無いなあと思った。

「だめに決まっつてるでしょ。多すぎると身体にダメージがでるんだから。……そうね、優斗の器が塵同然だとして、受け取っつてしまつた量は……うん、小石並かな。」

うわーお。スケールの小ささに泣きそつです。

「非道くないか、俺の扱い。」

雫は平然と答える。

「先に塵同然つて行つたのは誰？」

う……。言い返せません。

「……」

少しの間、雫は考えるようなそぶりをを見せて、

「……キスして。」

こつ言つた。

はあ!?

「だから、もう一回移すの!!どうせ黒い靈気ばつかり受け取つたんだろつし。もう落ち着いたから、大丈夫。」

え……。

「うつう」

唸つてみた。諦めてくれなかな。

「唸つてもだめ。はい、早く!」

雫の剣幕は勢いを増した。

「……わかつたよ……」

なんだかなあ。どうして好きな子にキスしてつて言われたのに嬉しくないんだろつ。

「あ。」

不意に気がついた。

「ん？どうしたの。」

ここは自分の家の前だった（しかもマンション）。

いいことを思いついてしまった。そうだ、許可は下りてるんだから。

「ちよつとこつち来て。」

雫の腕を掴んでマンションの建物の影に連れ込んだ。

「え、ちよつと　　．．．ん．．あ．．。」

雫は状況を理解できないまま唇を奪われることとなった。

「．．．．はあ．．つあ．．。」

優斗は明らかに必要以上の時間長くちづけてやっと雫を離れた。

「．．．．こういうやり方はずるいと思う。」

赤くなつて雫は言った。

「いいじゃん。雫はもう人を好きにならないんだろ？だったら行為だけでも楽しめば。」

素知らぬ顔をして言つてやった。少しは意識したか、ばかやるー。

「そ、そりゃそうだけどさ。やっぱりこういうコトされると、その．

．．意識しちゃう．．．し。」

雫から意外な答えが返ってきた。

「え。俺とかどーとも思われていない感がすつごくしてたんだけど．．．違うの？」

俺の彼女の心配していたときとか。

「意識してないわけ無いでしょ。でもさ、思つちやいけないじゃん。私、煉の件が終わったら優斗とは逢わないつもりだし．．私がいれば死ななかつた。そして今は煉。みんな、私のせいだ。」

そんなことない、そう言おうとしたけど初めて見る雫の瞳の暗さに押されて言えなかつた。

「“そんなことない”？ううん、違う。違うんだよ。優斗はまだ分

かってない。この能力の本質を。優斗だっていい加減嫌になつてきたでしょ？私のそばにいるのが。」

何言つて……。そんなわけ……。

「ない」？そんなの言い切れる？だって次かもしれないよ？」

な、何が……。

「優斗の番。」

雫の声はどこまでも暗く、深い。

「どうということ……。」

それだけ、言葉を絞り出した。

「私が大切に想えば想うほど、その人を私の能力は殺しちゃうんだよ？」

「どうということだ……？」

「ねえ……。優斗、私の一族が昔からやってる家業……ってなんだと思う？」

自嘲するように雫は言った。

「……呪いで霊から人を護ることだろ？……違うのか……？」

まさか、四年前の真那が死んだときと煉が悪霊に取り憑かれてるのは……関係があるのか？おぞましい考えがよぎる……。いや、薄々気がついていたんだ。本当は。けれど考えないようにしていた。俺は弱い。雫のように全てを受け入れるなんて無理だ。

「うん、半分はあたり。けど優斗が言ったのは表の姿だよ。物には必ず裏があるよね？」

光が強くなれば、闇が濃くなるように。

「……やっぱり……。っ。」

“雫が悪霊を引き寄せていた？”

その時、確信してしまった。

もはや雫の瞳には何も映ってなかった。

「そう、私の一族は裏でいつも悪霊憑きの仕事もしていたんだって。いろんな人の恨みを聞いてその人の恨んでいる人を、悪霊に取り憑

かせたり呪いを使って殺すんだって。

恨まれている人に憑

ける悪霊はどこから連れてくると思う？」

もう、分かってしまった。

「私の身体なかに流れている血はね、悪い霊を引き寄せる力があって、それは必ず一番近い人に取り憑くんだって……。」

雫の瞳から涙がこぼれた。

「好きだよ、優斗。でも、好きだからもう優斗とは 逢わない

ことにする。」

そう言っつて、雫は走っていった。

俺は一人、取り残された。

第五章 神

「……これで、いいんだ。」

だって、私がそばにいたらきつと私の血は彼を殺してしまうから。

「はぁ……っはぁ……っ」

涙がこぼれた。走っていて、息が切れた。構わずに雫は走った。

どこへ行くのかも分からずに……。

また、振られた。

やっぱり、俺は彼女とは一緒に居れなかった。

「あー……、くそっ。学校なんて行く気がしないし。」

もどかしかった。無力な自分が。もつと、力があれば。

結局俺は彼女の枷かせにしかなれなかった……。

「ごめんなさい……ってこの前の……！」

雫は泣いていたのであまり前を見ずに走っていた。結果、不良にぶつかってしまった。運悪く、その不良はあの、ナンパ男&その他だった。

「えーなに、泣いてるの？もしかして保坂のやろうとけんかした？」

びくりっ、と反応してしまった。不覚にも。

それを見てにやりとナンパ男、名前を藪原と言う は笑っ

た。

「じゃあ、俺達がなぐさめてやるよ？」

そう言っつて、男達に薄暗く人気のない路地裏に、力ずくで雫は連れ込まれてしまう。

「やめてっ。離して……っ」

抵抗する雫に構わず男達は力ずくで雫を押さえつける。

「離してよっ！！」

優斗から受け取った力のせいで雫の身体は強い疲労感に襲われていた。

数人がかりで押さえつけられれば、ろくに抵抗もできない。

藪原が動けない雫の首筋に、スタンガンを当てた。

「か・・・あつ。やめ・・・。」

すでに体力の限界を超えていた雫はか細い声を絞り出すことしかできなかつた。

本来、能力ちからを持つている雫にとってスタンガン程度の電流は平気なはずだつた。だが、その時の雫は精神的、肉体的にもぼろぼろだつた。雫は溢れてくる力を抑えることで精一杯だつた所に思い切り、電流を何度も食らつた。

「いや・・・あ・・・っ。かは・・・ッは・・・あ・・・。はあ・・・。」

ああああああ・・・ッ！」

藪原はスタンガンの電流をどんどん強めていく。首筋にそれを当てられるたびにびくりッ、と雫の身体が痙攣する。

「おいおい、そのくらいにしとけよ。女だろ？流石にかわいそうじやんか。」

男の一人が言った。藪原は「あと少し・・・。」とって手を止めない。実はこの男、かなりのSエスだつた。仲間は今もう呆れていた。

「いつものことだけどさ、ホント藪原ってこういうの好きだよな。」
「毎度毎度ターゲットにされる女の子が可哀相になってくる・・・。」

「っーかさ、この子・・・雫だっけ・・・雫のこと相当気に入ってるみたいだぜ。」

「うわー。もう死んじやうな、この子。」

と、仲間だけで勝手に雑談し始める。

「でも、雫みたいにかわいいのだつたら、俺もやりたくなるかも。」

「うえー。お前趣味悪っ。マジかよ。」

「あ、ソレ分かる。藪原みたいにあそこまでやらなくても、ちょっ

とやりたいかも。」

不良達の雑談の間も、雫は電流を受けていた。

「あれっ。まだ気絶しないの？すごいね。頑張ってる？じゃあ、最大値……。初めて使ってみるか。」

藪原がスタンガンをいじり始める。

「……はあ……。はあ……。はあ……。はあ……。」

もう、雫には抵抗する力も、あふれてくる力を抑える気力もなかった。

「やめて……。」

雫が静かに言った。だが、さっきまでの怒りは消え失せていた。

「ん？やめてと言ってやめる馬鹿がどこにいるの？あ、その人たち。最後にするから両手押さえといて。倒れないように。」

心底楽しそうに藪原が笑う。

他の男達がへいへいと従う。

雫は両腕を捕まれて立ち上がられる。

「……。」

両手を羽交い締め状態にされても雫は黙って俯いていた。

もう、この男達に何も感じなかった。感情がないなら、能力も出
ては来ない。

「あれ？観念したのかな？雫ちゃん。それとももう力が残ってない？」

くい、と俯いてる雫の顔を上げて自分の方を向かせる。

「うわ……。やば、藪原の気持ち分らないでもないかも……。」

雫の顔を見た不良の一人が言った。

雫は瞳に涙を溜めて、男達を見上げていた。

藪原が雫に言った。

「なあ、雫ちゃん。今日は一緒に遊んでくれるよな？まあ、起きたらもう逃げられなくなってると思うけどな。」

藪原が今度こそ逃がさない、と言う風に笑った。そしてゆっくりとパワー最大のスタンガンを雫の首筋に近づけていく。

ばちばちつ、とスタンガンが鳴った。

あと少しで触れそうなとき。

「……………」

雫が何か言った。

「ん？何？？」

藪原が聞く。

「……………」

雫はそれだけ言った。ただ、無意識に出た言葉だった。

「だから、保坂は来ないって。」

藪原は嘲るように笑う。

【確かに優斗はこないが。】

「!？」

瞬時に男達の顔は強ばる。理由は、その“声”が直接脳に響いてくるような、そんな感覚だったからだ。藪原も、流石にスタンガンの手を止めた。

「……………」

いつもの雫なら瞬時に反応し、男達を守ろうとしただろう。だが、その時の雫にとって悪霊の出現は何でもないことのようにそのまま頭の中をスルーしていった。

なにも、感じなかった。

眼には見えているが、それは認識されずにそのまま放置される。

耳は聞こえているが、それは認識されずにそのまま放置される。

人形のように、何も感じなくなった雫。

【雫をはなせ。まあ、命まで取りはしない。】

その言葉に恐怖を覚え、次々と男達は逃げてゆく。

「……………」

雫を押さえ付けていた男達が逃げ出した。それと同時に、雫の身体は崩れ落ちた。

倒れる寸前に、雫と同年齢くらいの背の高い、顔立ちの綺麗な黒髪の子　煉が雫の身体を受け止めた。

「……雫……。ごめん。すぐに助けられなくて……。」

煉は悔しそうに言って、まだ意識の戻らない雫を抱きしめた。

「ん……？」

目を開けると、そこにはのぞき込んでいる煉の顔があった。

「大丈夫か……？」

連は心配そうに尋ねた。

「う、うん……？大丈夫……。」

どうということ？

煉からは全くと言っていいほど悪霊の邪気が無い。

おかしい。おかしすぎる……。あのとき、確かに悪霊の気配がしたはずなのに。

辺りを見回すと、そこは古びた公園だった。たしか、双葉山公園。雫は、ベンチに寝かされているのだった。自分と煉、それ以外の人は見あたらない。

だいたい、邪気のあるはずの悪霊（もしくは取り憑かれている人間）が何故神社に近寄れる？

この双葉山公園はその名の通り双葉山のふもとにあり、その奥に神社がある。

「……？ホントに大丈夫？」

全く他意のない様子で煉は自分を気遣ってくれる。いつもの煉だ。ま、まさか……。

でも、あり得ない話ではない。今まで小学校から一番そばにいる時間が多かったのは、煉だ。つまり、霊感が鋭くなっていてもおかしくはない。

「ねえ、煉。ここ最近、変な事って無かった？妙に調子がいいとか

悪いとか。」

そう聞くと案の定、煉は少し首をかしげながら、予想道理の答を言った。

「ん〜。そうだなあ。何か突然記憶がなくなったりとか、妙に疲れなくなったとか・・・。」

「やっぱり・・・。マジで？」

「そう・・・なんだ。ありがと。」

そう言って起きあがろうとする。
がくっ

「!？」

身体に力が入らなかった。スタンガンは予想以上に効いたようだった。よく見ると、身体中に傷跡があった。特に、直接電流にさらされていた首筋は皮がはがれ、無惨に黒く焦げている。

「お、おい。無理するなよ。」

そう言って煉が抱き留めてくれる。

どうにかベンチに座り直した後、煉に言った。

「・・・出てきて。」

「は？と言う顔を煉がした。

「当たり前か。素直には出てこないよね・・・。」

「出てこないと力づくで出すわよ。」

「ますます煉が困った顔をする。」

「・・・何が？」

「煉が当然の問いを言う。」

「煉、あなた悪霊に取り憑かれてる。しかも、同化し始めてると思う・・・。」

簡潔に、言った。簡潔すぎて逆に煉は意味が分からないようだった。

「・・・別に、取って喰おうってワケじゃないわ。話がしたい。」

「雫の熱意が通じたのか、煉の中にいた悪霊が・・・ってあれ？」

「わあっ。なんだおまえっ。」

自分の中から出てきたモノに煉は大きな声を上げる。
「きみ……。優斗が言つてた半悪霊化した少年の霊？」
こくこくっ

と、少年のカタチをしたモノは頷いた。待つて、優斗の話だとも
つと強力な……。そうか！！

「 ってことは！！煉、逃げて……。っ」

雫はそう言つて、煉を思いっきり後ろに押し倒した。抱き合うよ
うな体勢で雫と煉は転がった。

ついさっきまで煉がいた所には大振りのナイフが地面に突き刺さ
つていた。

「っ。やっぱり、これが狙いだつたのか。」

乖離かいり！！！！

雫が呪文の様な言葉を発すると、その場の空気が変質した。公園
全体を覆う灰色のソレは、中の時間だけ止めてしまったようだった。
中にいる人間に、灰色のフィルムを通して風景を見ているように錯
覚させる。これは名の通り、外の世界と一定の空間を隔離する働き
があつた。

前にも、あつた。

俺は、前もここに入ったことがある……。そうだ、真那が死ん
だとき……。

「ごめん、煉。巻き込んだやつた……。」

覆い被さるように煉の上に乗つていた雫が立ち上がろうとする。

「ったあ……。まだあんま動かないな。」

でてきなさい！！

雫が言い放つとふっ、と十メートルくらい先にさつき飛んできた
ナイフと全く同じカタチのモノを両手に握りしめている、中年の男
の悪霊が現れた。

「くくく……。霊はいいねえ。誰かに取り憑くのはおもしろい
よお。その生きている少年にも闇があつた。だから俺あ取り憑け
たのさ。くくく……。俺の力だつて使つてやつたんだ。」

雫は静かに、悪霊へと堕ちてしまった中年の男を睨み付けた。

「言つことは、それだけ？闇があるから何なの。そんなもの、みん

な心に持つてるわ!!」

そう叫ぶと雫は右手を横に挙げた。

『私の中にある神の血よ。私に力を貸しなさい。』

すると、雫の指の先から紅い珠がふわりと出てきた。ソレはするすると次から次へと列をなして鎖のようになった。

「おお、それが神代かみしろの力か。話には聞いていたが、本物は初めてだ。

」
中年の男が言う。

「何言ってるの。いま神代ちからの能力ちからが使えるのは私だけよ。それに、神代ちからの能力は個人個人で違うのよ。そんなことも知らずにこの地区に來たの。殺してくれと言わんばかりに馬鹿ね。」

雫は冷静に言う。

「へへっ。その神代を殺せば、名も上がるだろう?」

そんなことを言う男を雫は無視して、右手を標的に合わせた。

『血雫ちしずくの珠鎖たまぐさし、あいつを縛しばれ。』

そのとたん、ゆらゆらと揺れていた血のように紅い珠の鎖は、もの凄いい速さで中年男に襲いかかった。

「こんなの簡単に斬れるんだよ!!」

中年男はナイフを振り回す。紅い珠鎖はぶすっ、ぶすっ、と鎖は切断されていく。

「へへへ……っ。お前は俺には勝てない。おまえはここで殺されるんだよッ」

薄ら笑いを浮かべる、中年男。

「まるで麻薬中毒者だね……。自我が壊れかけている。ついでに言うつと周りを見なさすぎ。」

雫はそう言った。そして、中年男が言葉の意味を理解する前に、分らせてやった。

『繋がれ。』

「お、おお!?なんだこれ、どんどん繋がって……ぎゃあああああ
あ!!--!!」

男に細かく切断された珠は、落ちることなく男の周りに浮遊していたのだった。その一つ一つが雫の言葉に反応して近くの珠同士、繋がっていった。そして、繋がった鎖は男を締め付けた。

「ぎゃあああああああ！！やめてくれ！！もう、やめるから！！」
あまりの痛みにも男は懇願する。

「そう、わかったわ。離してあげる。」

意外にあっさりと、雫は言った。すると、すぐに鎖は男を締め付けるのをやめた。

「か、はあ、はあ・・・」

やっとの思いで男は息をする。

「なんか、おかしい・・・。なんでこんなに弱いのか？まだ、何かある気がする・・・。あ、煉。大丈夫？」

雫が男に背を向けた。その瞬間、男は雫に背後から斬りかかろうとした・・・が。

「あれ？もうやんないっていうのは誰だったかなあ？」
くるりと一回転し、男に満面の笑顔を向ける。

「ひっ」

その笑顔のあまりの恐ろしさに、男はナイフの手を止めて、凍り付いてしまった。

凍り付いた男を無視して、もう一度雫は振り返った。

「そう言うことだったんだ。少年の幽霊君？って、今の姿じゃ“少年”とは言えないか。私より、ちょっと年上？それに、その様子だともうすぐ幽霊でもなくなるよね。」

雫の視線の先には金縛りでもされて動けないで居る煉と、その煉の首筋にナイフを当てている、雫と同年齢くらいの男の子のカタチをした幽霊。

「同年なワケないじゃん。俺、随分前からここに居るんだよね。てゆーかやっとなんか分かったの？神代の娘。」

端正な顔立ちをしたその青年の幽霊は、雫を睨み付ける。

「うん。つまりこういふ事でしょ？君はこの神社に宿ってるほぼ妖

怪化した、幽霊。いや、妖怪って言うより神社にいるから八百萬の神の中の一人になったのかな？まあそれはどっちでもいいとして。悪霊・・・ここにいる男の人が、私に引き寄せられてやってきた。この人は普通に私のもっとも大切に想っている人に取り憑こうとした。けれどあなたが、この人に妖気を与えたでしょ。だから器の足りなかったこの人は、自分の意識がはつきりしなくなるまで壊れてしまったんだ・・・。」

神社に宿る神は雫の推理をただ、黙って聞くだけ。

「分からないのが、どうしてあの・・・えーと・・・藪原って人から私を助けてくれたのか・・・どうして？この悪霊の人に指示を出したの、あなたでしょう？私のこと嫌って、男の人に妖気を与えたのに。」

雫は尋ねる。心底、不思議だったのだ。

「答えてやる。理由としては二つ。一つ目。この煉という人間の事が気に入ったから、彼のほしいと思った力を与えてやった。まあぎりぎりまで焦らしたがな。二つ目。お前が予想以上に、健気だったからな、つい魔が差してなあ。」

絶対この人、生きていた頃は女好きだったんだ・・・。

その場にいた三人（中年の男の悪霊・煉・雫）がほぼ同時に全く同じ事を思った。

「まあ、理由を聞いたところで、状況は変わりはないと思うけど？」

にやり、と神が笑って言った。

「その様子だと、おとなしく煉を離してはくれなそうね・・・。」

不敵に雫は笑う。

「当たり前だ。そうでなければこんなコトしてないし。ところで、名を何という？」

神は聞く。

「神代雫。生まれて持った肩書きは、『血の雫・血雫の珠鎖』。名

前はここから取ったのね。きつと。ちなみにこの肩書き、私は・・・
・大嫌いだわ。あなたの名は？神様。」
神様は、答えた。

「人間だった頃の名は、忘れてしまった。今の名は・・・そうだな、
双葉ふたばの尊みことかな・・・。まあ、略して双葉だな。この名は、まあこ
で神様やってたやつの名だ。ちなみに神様と呼ぶのもやめてほしい
な、その肩書き、嫌いだから。」

にっこりと顔に笑みを張り付かせながら双葉の尊は言った。
「ふーん。そうなん、だツツ!!」

最後の語尾の部分で、雫は強く地面を蹴っていた。

一気に双葉との距離を詰める。そして射程距離内にはいると鎖を
左の手から勢いよく放ち、煉に今にも触れそうなナイフを弾いた。

「・・・つと。あつまいなあ。煉を見捨てれば勝機はあるのに。」

双葉はそう言つて、弾かれたナイフを無視して、その手で煉を前
に、つまり雫のいる方向に突き飛ばした。

「!?!?!」

状況を全く理解していない煉と、瞬時に反応する雫。

「痛う・・・つ。」

すぐさま煉を受け止めようとするが、スタンガンに痛めつけられ
た身体が言うことを聞かない。踏ん張りきれずに雫は煉と一緒に倒
れてしまった。

強さの次元が違う・・・。雫は自分が思い上がっていたことを
痛感した。

「ごめんね。二人とも気に入ったんだけどさ、これが上からの命令
だからさ。」

双葉が煉と一緒に倒れている雫を見下ろして、言った。

また、私は守れない。本当に大切な人を・・・。

「俺がここに宿されること、そして俺が雫を殺すこと。全てがはじ
めから仕組まれていたってのが気に入らないがな。」

そう言いながら、双葉がナイフを振りかぶる。
「じゃあね、ばいばい。」

確かに、このままでは雲に勝機はなかった……。。

第六話 神を狩る男（前書き）

ちよつと血とかが出てきます。苦手な人はやめといて下さい。すみません。

第六話 神を狩る男

「じゃあね、ばいばい。」

そう言っただけで自分へとナイフは下ろされる。

正直言っただけで、何が起きているのか煉には、理解できなかった。

確かにこの男は、自分の願いをあのかきは聞き入れてくれた。だが、その男に今度は殺されそうになっている。理解不能だ。

しゅっ……。

ナイフが風を切る音のはっきりと聞こえる。ひどくゆっくりと、その凶器が大きくなってゆく。そして徐々に視界に入るモノがそれだけになり……。

ぐさり。がり……。

ナイフが肉に深々と突き刺さる湿った音と、骨に金属が突き立てられ削れる音が聞こえた。

にもかかわらず、煉の身体には何の痛みもない。

「ぐ、あ……ッ!!」

雫が声を上げていた。雫の手のひらには柄まで刺さったナイフがあった。痛みをこらえ、彼女はナイフを押し返すように力を込めている。

思考が、停止した。

雫が自分を庇ったのだと、すぐには判らなかった。

「やっぱり、そうすると思ったよ。ずっと見てきたかいたがよかったなあ。雫の行動パターン、すっかり読めるようになったよ。」

にこにこしながら双葉は言った。ぞっとする笑みだった。返り血が顔についているせいで余計にすごみを増している。

ずしゅ……。

双葉がナイフを乱暴に引き抜いた。

「ッ!!!!」

雫が言葉にならない悲鳴をあげる。

「今のナイフには、心を殺すクスリが塗ってあったんだ。これを食らうと、徐々に何も考えられなくなつて、何に対しても感情を持たなくなる。いや、“持てなくなる”の方が正しいかな？ 雫、お前も直に上からの命令に従わなくてはならなくなる。・・・俺のようにな。せめて、お前が大切に思っていた煉と、優斗とか言う奴は助けてやるよ。」

言い返したのは、雫ではなく、煉だった。

「ふざけんなツ。何が助けてやる、だ。俺はそんなので助かっても嬉しくない。今すぐそのクスリとか言うのを無効にしろ。」

しゃがみ込んでいる雫を支えながら、煉は言った。

「残念ながら、俺には無効にすることは出来ませーん。俺だって、そのクスリが恐くてこうやって渋々上に従つてんだ。無効になんか出来るわけ無いだろう？」

そう言つて、双葉は首を振る。

「でもさ、これでも出血大サービスよ？ 俺への命令内容は、『雫を操れるようにすること。雫を元に戻せそんな人物は排除しておくこと。』だぜ？ 煉も優斗も当てはまりそうだけど、霊力無いって嘘ついて、上には通しておくよ。感謝してほしいな？」

煉はぎり、と奥歯をかみしめた。俺では雫を守れない・・・。

「う・・・ん。ありがとう。」

手のひらが貫通した痛みと、クスリによる自我崩壊。その二つに耐えながら、雫は微笑みさえ浮かべそうな顔で、双葉にお礼の言葉を向けた。皮肉でも何でもなく、ただ、『ありがとう』、と。

「！！なんで・・・っこいつはお前を壊そうとしているのに。どうしてだ・・・っ!？」

煉はそんな雫の行動が理解できないようだった。

「あーあ。気をつけろつて、言われてたのに・・・な。私が悪いんだよ。煉。こんなに力を操れきれない人間は、危険以外の何でもない。“上”の判断は当然だよ。私たち、力がある者は無知で弱く、時に傲慢なたくさんの人々を守らなくちゃならないんだ。私はその

使命遂行の邪魔になる。今の内に操っておくのが賢明。まあ、煉と優斗が無事ならいいや。さっきからどうやって逃がすかばかり考えてたし。だから、双葉。すっごく感謝してる。・・・ありがとう。」

一気に喋ると、雫は力なく俯いた。もう、顔を上げていることから、出来なかった。

「このクスリ、拷問にはもってこいかも。進行を遅らせたりはやめたりすることが自在に出来れば、相当脅しに使えるね。なんか、めっちゃこわい。自分が壊れてくのが判る・・・。」

そう言う雫の目にはもう、光が無くなりかけていた。

「・・・最後にサービスだ。煉と優斗、二人の霊気、無くしてやれ。お前なら出来るだろう。今後の危険も減る。一緒にお別れの言葉とか出来るかもな。優斗ももうすぐくる。」

双葉の遠回しな優しさの言葉と共に、雫の目に光がわずかに戻ってきた。

「俺の力じゃ、これくらいが限界だ。これ以上、クスリを食い止めることは出来ない。人として最後の時間だ、これから雫、お前は操り人形になるんだから。」

うん、という、さっきより元気な雫の声が聞こえて、煉はほっとした。だが、すぐにもうすぐ雫は雫でなくなるのかと思うと、気持ちが沈んだ。

「煉・・・。初めて会った五年生の時。怖がらないで、話しかけてくれて、嬉しかった。何でも話せる友達だったよ。一番、近い人だったよ・・・。」

真っ直ぐ、雫が見つめてきた。とても、今から自分が壊れてしまうことが判っている人間には見えなかった。それほど、雫は穏やかだった。

煉は、最期に伝えておこうと思った。例えそれが叶わなくても。意味のないモノでも。

「なあ、俺の闇ってなんだか判る？」

雫は首をかしげる。

「……優斗に対しての嫉妬、だよ。確かに高校に入ってから雫とはよく会った。優斗よりも俺の方が長く一緒にいた。けど、いつも雫も心の中には優斗がいたんだ。一緒にいるのは俺なのに、雫の心が俺の方を向くことはなかった。多分、俺の闇はソレだ。……雫が優斗を好きなのは判ってる。誰よりも理解しているつもりだけど、俺も好きだったから。雫が一番大事だったよ。」

煉がひとしきり、喋った。雫はありがとう、と言っただけだった。けれど、煉は満足だった。

「キスしていい？」

煉は聞いた。

「ん、いいよ。」

雫が目を閉じた。

実際はの所、霊気を移すにはどうせキスしなければならなかったが、雫は何も言わなかった。

「ん……。」

こうして、雫は煉の分の力も背負った。

「あ、来た……。」

双葉がそう言った。

視線の先には優斗の姿があった。

「ど、どうしたんだよ、雫!？」

双葉や煉まで頭が回らないといった感じに、一直線に雫に駆け寄ってきた。

「その手……。」

優斗は絶句していた。雫の手のひらは、白い骨が見えるほど、肉が削られていた。

「ん、ホントだ、ひどくなってる。双葉、これ酸性だったりする？」
雫が言った。煉の霊力は一時的に雫を助けたようだった。やっと

優斗も来て、雫も安心したようだった。が、次の瞬間には

【発。】

もう、その目には光が無くなっていた。

一言の発動手続きによって、光は奪われてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

がくっ

雫が崩れ落ちる。

「ちょ、ちょっと待て!! どうして、俺力弱めてないぞ?!」

「は!?! お前が何かやったのか!?!」

双葉が違う(いや違わないのだが)と言う前に誰かが遮った。

「双葉、貴様がしつかり仕事が出来ないからだ。神代の娘に感情移入しすぎだ。保坂優斗は排除する。上からの命だろうが。これは譲れんぞ。」

突然、一人の男が現れた。

「おい!! 神狩!^{かがり}ふざけんな。あと少ししかできなかったのにつ。

しかも、優斗は殺させないからな。雫との約束だ。」

その双葉の様子に、神狩と呼ばれた男は、静かに言った。

「何を言っている。その娘に貴様が強く惹かれていたことは知っていたが、これほどまでとはな。こんな事をしたら、貴様までその娘の二の舞だ。そんなことは俺が許さん。」

神狩の言葉に言い返せない双葉。実際、その通りなのだ。こんな、雫の肩を持つ様な事をしていたら、双葉の命も危ない。

「ちょっと待った。どういう事だ。お前らが雫をこんなにしたのか。何故雫がそんなことされなきゃならない? ふざけんな・・・

ッ!!!!!!」

そう言つと、優斗の瞳めが変わった。優斗の瞳は、琥珀色に輝き始めた。

「優斗・・・?」

煉が彼の名を呼ぶが彼はこちらを向かない。

優斗は双葉や神狩から感じるモノと同じ、人間ではない者達の気

配を漂わせていた。優斗の周りを眩い純白の光　　靈気が包み始める。

「俺は人じゃない。神だ。神狩り、お前にあの日、人間の身体なかに入れられたんだ。」

優斗は言う。神狩りかみがりとは、神狩かがりのことだ。じつは『かがり』は双葉が勝手に付けた省略したあだ名のようなもので、双葉しか使わないい。

「えっ。おまえ、そんなコトしたのか!?これってあの白籠ちやくろうじゃないのか?十七年前に忽然と姿を消した純白の龍神・・・しかもめっちゃ名のある主じゃねえか!」

双葉が驚く。そんな双葉を無視して神狩りは言った。

「ふん。今になって思い出すとは。やはり、できが悪いな。上が今更、殺せ殺せと五月蠅いのでな。証拠を無くすようにと。それでわざわざ神代に目を付けさせたわけだ。思い通りに動いてくれたよ、上は。おかげでお前と戦うことが出来る。」

煉には、優斗の奥歯をかみしめる音が聞こえたようだった。

「それが目的だったのか。」

優斗が怒りを押し殺したような、そんな殺気を放って、言った。

「そつだ。あの姿のまままで居られては邪魔が入る。お前と戦うために十七年、待っていた。」

戦闘狂なのは知っていたが・・・と双葉がつぶやいた。

「・・・なんで、俺と戦いたいなら雫まで巻き込んだ。」

優斗は憎しみを込めた琥珀色の眼で、神狩りを睨み付ける。

「その方が面白い。だからわざわざお前と神代を引き合わせるように仕組んだ。最高の舞台を造るためには、入念な準備が必要だからな。」

その答に激怒したように、優斗を包む光が輝きを増した。

「では始めよう。全てを壊す戦いを。」

神を狩る男は暗く悦びに満ちた顔で、嗤った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6819b/>

血の雫

2010年12月10日17時10分発行